



延命大仏(阿弥陀如来坐像)と子安地蔵尊(子安地蔵菩薩坐像)

延命大仏(向かって左側)は延命長寿の大仏様と言われる。子安地蔵尊(向かって右側)は、安産と子育て地蔵尊と言われ、ご婦人・主婦の方々の信仰が高い。

由来は、名高い江戸の大輪坊さんが、寛政 12 年(1800)北国街道沿いの今井村北原地籍の薬師堂沖(現今井 1735 番地天神社北側)に、間口 10 間(18.2m)・奥行 4 間(7.28m)40 坪(132 m<sup>2</sup>)の阿弥陀堂を建立し、大輪坊さんが寛政 4 年(1792)江戸で寄進した大仏さんを長い年月をかけて、この阿弥陀堂に遷座供養した。以後この阿弥陀堂は、善光寺参拝途次の祈願所として、道中の安全と延命長寿を願う人々が立ち寄り、祈願と無事の御礼参りで連日にぎわった。周辺には旅籠(はたご)や茶屋が軒を連ね、北原地籍沿道は大いに繁盛した。

明治 5 年(1872)、排(廃)仏毀釈(仏法をやめ、釈迦の教えを捨てる)の世相によって、阿弥陀堂は取りこわされ、大仏さんは住民の悲願によって今井の親寺切勝寺に遷座し預っていただき供養を続けた。

(注)明治元年(1868)3 月の「神仏分離令」発令によって、排仏毀釈の世相が広まり廃寺・廃堂などが強行された。

終戦後の昭和 24 年 11 月現在地にあった地蔵堂を取りこわし、この跡地に区民の寄進によって大仏殿を新築して、切勝寺から大仏さんを遷座し、地蔵尊とともに安置して「北原延命大仏殿」と呼称した。

子安地蔵菩薩坐像は、延命大仏に比べやや小さいが、2m 余の高さはある、右手に錫杖を持ち、左手で乳児を抱いて顔をやや右に傾けた姿勢である。

制作技法は、寄せ木造りであり、彫りも深く、体全体は漆塗りであり、唐草模様及びボタンの花模様が肩及び右側の下に見られる。

仏像であるが、左親指を外側に反らしている珍しい形をしている。制作年代は、延命大仏と同じ年代ではないかと推定される。

(出典：川中島町北原区の「ふるさと歴史探訪」P.P.66-75 より一部抜粋)